

墨俣町 本來寺 里雄 敬意

東本願寺、別院、手次のお寺の報恩講にお参りされた、または、これからお参りするという方がおられると思います。

親鸞聖人は私たちに何を伝えたかったのか？

少しずつでも確かめていくということが知恩報徳の生活になるのではないかと思います。

浄土真宗、親鸞聖人のお念仏ぶつの教えの中心は「信」ということです。

「本願を信じ、念仏をもうさばぶつ仏となる」と『歎異抄』で示されています。

浄土真宗は、「信心」の徹底ということが大切なこととされています。仏さまが「助けてあげよう」といくらいわれても、その言葉を信じて受け入れようということがなければ、救いが救いとなりません。まず、「信心」ということがとても大切なのです。

その「信心」を親鸞聖人は、どのように私たちに教えて下さっているのでしょうか。それを端的に教えて下さる和讃があります。

ほんがなりき
本願力にあいぬれば
むなしくすぐるひとぞなき
くどく ほうかい
功德の宝海みちみちて
ほんのう じょくしい
煩惱の濁水へだてなし

「本願力にあいぬれば」ということは、阿弥陀如来の「一切衆生を平等に救う」という願いに遇えたらという意味です。それは、別の言い方をするなら、阿弥陀如来の願いを受けとめる信心を頂けたらという意味です。

信心が頂けたならば、「むなしくすぐるひとぞなき」と続きます。ここに信心が、私たちにどのようなはたらき方をするのか、ということが述べられています。

それは、「むなしさ」を超えていくというはたらきです。

親鸞聖人は、そういう「むなしさ」を本当に超えてゆける道が「信心」であると教えています。「信心」とは、「鯛の頭も信心から」というように信じ込もうとする心ではなく、「仏ほとけの眼」「仏まなこの世界」をいただいた世界観であり、人間観であります。

「本願力にあいぬれば」ということは、仏さまの攝取不捨のおこころの中に自分が見出された感動であり、阿弥陀の世界を大切に、依り所として生きていくという事です。それは同時に人間の価値基準をあてにしない、頼りにしないということです。